543
シ
43

一首書時
周氏蒔

大菓やましかれ
山乃ゐえまた
松もやむをつれし
子海のつきし

二枚之内

嘉辰令月
歡無極
万歳千秋
樂未央

543
シ
43

九大學圖書

九州帝國大學圖書館
昭和24.7.13
184133

わか君ハ千世
にやちよに
さゝれいしの
いはほとなりて
こけ乃むす
まて

寂蓮法師
さびしさハその色
としもなかりけり槙
たつ山乃秋の
夕暮

西行法師
心なき身にも
あはれは志られ
けり
志ぎたつ沢乃
秋の夕ぐれ

藤原定家朝臣
見わたせハ花も
もみぢもなかり
けり浦乃苫や
秋の夕ぐれ

同

花

ますやまんかくの
みなきさく羅の花
乃ゆきちる春のあ
さ本能

雪

庭乃雪にうつ路
はきてゆかむ
川るを
とはれはわりと
人やこゝろん

月

あつら思ふやまの
いかの称さ久全た
さ和かきれまの
月そはるしき

四枚之内
弐巻秋の
詩哥かと
よろし

咲ちるもかとも
すまれ妻
乃く代を
をえて花ゆゑ
くしいて
ちや

あきかれ
山のりを
いろの花
川の緑
身にしみて
こふみしき
ふく

見えてふる
床も川ゆ宿き
とさしぬも
おいの禄さめし
おもろ
う追思
ろ

秋乃　志れ小
色は　ちる
志して色　堤
むし　ゆ花乃
をさし　うら
小倉　か奈

又校ニ附
弐又偏五行
五方又味

青
かを竹乃葉むしの
いろよ月のふかき
玉れすきれ小ゑて
新葵え

黄

枝うへ咲
きしの山吹
花ちりて
あのみ乃
つ輕ま
かこ我
きえ
なる

赤

志く礼
波る雲も
日く宮に
こ子
乃らのし
りんち
感
ちゝす
拙め移く

白

川いうらの 縁
涛しゝ気
拙しみ覚
志く雲乃居へ
千川こ祢の
やまさし
良

黒

むも玉乃やみの
う川しにうさ
の
くろ
為見しき拙て
夕こ
かなな記
康

六枚
或古新の
六りきん

山城

駒とめて猶水
かはむやまふきの
花の露そふ井手
のたまかは

摂津

みわたせは
なみのしからみかけてけり
うのはなさけれ
たま川のさと

近江

あすもこむのちの
たま川萩こえて
色なるなみに
月やとりけり

陸奥

ゆふされは
しほかせこして
みちのくの
野田の
たまかは
ちとりなく
也

武蔵

むかしは浪で
川くりさしくに
ものしれ人の
あれしきやなき

紀伊

ますれても　もくらんや
しつらん猿人の
まるれくおくの
蓬海河水

浮くくとられ
世中此おりよ
ゆまは
ゆまし扇さるお添
万はる此名礼

見きくても
いつ用もかふ
さるりの
をうれよの中よ
ゆましおまつ
ひ年

川霧をふかくいとひて
たちのほるかはへの氣れ
時さへ
かれ
世の
絶めて
みなへ
の江

なつはすもみな景
つんてまつ
あきそ
ありて
海さる
こ
とやきたに
ゆくへむかしや

ききまさて
乃花見ん
も
おもひれ
腰をたて
秋の
時なそ
空に
やまさ
秋
なり
けれ

あさゆふは
あまたの
宿の
こよひ
あさく
そ
おもへ
いて
さるそ
と
よしれ

見渡す以を斜る
み川乃猿毛母ありて
手多ま乃万法の成達

瀟湘夜雨

舟よ渡る子こにおゑ
なれまる乃あゆを
也やましくくる雲を
留るし游

洞庭秋月

あれ母渡むかすき
万しくかきさ兵て
月城和き　さて　か
嶋ら沖乃　見ん

遠浦帰帆

風むかふ雲乃
うかふすてたくて　見んて
津りをかえて
う人載るか　人

平沙落鴈

まつさそ又く
あきわすれてきる
為
行し乃雪間に
友も
舟 もと利

烟寺晩鐘

くれかゝる音
ましはしるよ
路いわ 乎ゆ乃音よ
く
な里 きそ方人も

漁村夕照

あま乃舟八入日から
波之にあらはれて
いそきいくしこれ
あのくれ乃
やと

山市晴嵐

松風の紀里
あしよりまつへ乃
志ばむ山 こえ行て
めとり乃雲

江天暮雪

あしの葉に来て
よる雪も深き江の
みきはのいろは
夕ともなし

同詩歌

瀟湘夜雨

先自空江易斷魂
凍雲粘雨濕黄昏
孤燈蓬底聽篷聲
只向竹枝添淚痕

舟とむる泊よしも知
あきまの雨に成ぬ
よもすから蜀志川くま
常しらね

洞庭秋月

西風蕭出暮天霞
万頃煙波浴桂花
漁笛不知羈客恨
直吹寒影過蘆花

旅ね波む水すさ
ましくさ秋ふ空
く
月代も影をきる
魚川しら
すゞ人

遠浦帰帆

鷺鳥青山一未殊（株イ）
潮平浪浪接大流
隔橋漸入蘆花去
家在夕陽江上帆

あかり人は舟ばかりこそも
波乃うへをゆくそしろき
かはさ波のまえあしは

平沙落雁

古字書空淡墨横
幾行斜雁下寒汀
芦花錯作衡陽雪
誤向斜陽刷冻翎

よはあきの
あし辺乃友
又 耳
見ゝ
数 さ不ゝ紀て
なかめ
飛り
の里も

煙寺晩鐘

雲遮不見梵王宮
殷々鐘聲訴晩風
無太上方於是處
為言只在此山中

見ゑうりも
雲乃ほ礼ゝ
てらこえて
いそやまふのき
この杯乃を
とかふ

漁村夕照

薄暮沙汀聚乱鴉
江南江北閙魚蝦
呼童買酒大家酔
卧看西風舞荻花

浪乃うへハ入日乃
あとにあらはれて
磯き　しかく
は　れ
乃　さ
くれ　せ

山市晴嵐

一竿酒旆斜陽裏
数簇人家煙嶂中
山路酔眠帰去晩
太平無日不春風

松原のあらし
霧よ里　みえ　川
山　うすきの　も
まき　草ハ積
れ
雲　て

江天暮雪

萬里晴湘雪暗空
諸峯玉立水西東
漁翁不覺暮寒重
醉看江天花葉風

いは　をし
りも今　おりよ
入江乃　波
の
松の　うき
雪乃
もゝ立よ　うきる

南圓堂藤原関白冬嗣

華構高排玉座春
紫藤花照紫金身
我先昔日得誠感
後世子孫為世臣

南圓堂藤大政大臣

あら浪は　この人のこと
もろきたま乱る
やちよ迄もたえてなき
松はの之藤

佐保川ノ螢　權中納言時
一帯晴川華館傍
緑楊陰暗引風涼
晩来千點流螢乱
疑是大官庭燎光

佐保川ノ螢　前内大臣公忠
とふほたる
このもかのもの川
しもく
さほ川のあさきに
ふかれたる
なきもしらす
無

猿澤池ノ月　文章博士淳嗣朝臣
氷浸影娥秋滿塘
神啼鬼哭是巫陽
合霄誰漉藻中玉
解為先王数断腸

猿沢池ノ月　右近衛權少將堪朝臣
むかしみる なきみ名に
おもひ出る 清きさへ乃
流れしとそく
月に浪かゝむと

春日野　藤參議右大辨經重
無臭無聲野色妍
只看麋鹿食草眠
巖深山与文靈固
斯殿聖神易地然

春日野　藤權中納言公勝
かすか山　志の
みよ乃　松
をとの　あし　や　おく　なる
雅く　に　さ世　かうん

三笠山雪　左大臣實時
白雪紛飛數峯
和光靈跡此山中
于時大樹著花色
業道知新利物功

三笠山雪　右大臣實俊
見るのき山はしして
女の久しく白ゆき乃
布の花に緑を
神やしらす

雲井坂雨　文章博士長朝

霹靂音鞭井底龍
来時変化与雲従
躍龍三級禹門浪
金牓尚遺風雨蹤

雲井坂雨　権中納言為重

むらさめのころのさきゆ
それはま　山は
おくよ　かゝら　かく
しくるね
坂と覚

東大寺鐘　権大納言実通

刹桶（漏イ）丹楹映古珠
金僊千六丈峥嶸
洪鐘撞速黄昏月
誰聴當初第一聲

東大寺鐘　前大納言善成

なくねのさるかいり
しき
名もふりし
かりぬる
寺の鐘のこゑ
尽よ

九枚之内

轟橋行人　権中納言冬宗

月落鐘沈山色澹
暮行失歩白雲程
孤村煙雨笠簑重
一片板橋車馬轟

轟橋行人　前中納言実世

すまさる人めもしけき
川波にふきたつをとを
とゝろきのはし

上品上生

年のしとあめしぬ
うへの胡音にたま
かくれし舟をそしき
おもふ

上品中生

あふさかのわきたる
しゝ川千この宮
みていゆやそしらむ
こちの月もまさま

上品下生

世中よそとて
さくしれなきのり
きはなる乃仏た
のむし宮のう
御し

中品上生

あきゝりに萩のる
浪のこなきなみ
袖やぬれまの
しめ重て不
ゆかし

中品中生

春きぬと人は
いへとも鶯乃
なかぬかきりは
あらしとおもふ

中品下生

ままに戒むをたのしみ
たのしみむしむや
秋のおもふ人の
ま和を厚きぬ

下品上生

吹からに秋の
くさ木のしほるれ
ばむへ山
風をあらしと
いふらん

下品中生

いまよりはうへてだに
みし花薄ほに
いづる秋はわびしかり
けり
定文

下品下生

あはさらしの
すみよし次はこと
ことはしげきを
かそすは来ね
いせ

幽玄體

もひめれハゆきとみ
おもし難波ちるみ
いくしても何まてもに
松の常

長高體

思ふとても
人のなかるゝも
あふ事はよ
月もさやけき

有心體

志乃川の入江の松に
おいにけり
見捨てぬるやは
海し

麗躰

うらしかし海の
入江のうら風に
おとたかき
あきの夕暮

事一無雙

大かた乃 きらひをは
袴の いろをも
祢さえ と かはり
かりそめ とて

面白酔

かにくるしまれ不成
あさるあきの
まちの 月こそ
うらむる 酔く

濃袴

梅のえ耳
きぬきるうくゝ次
春のまて
かさともいはまし
雪はなけれ
注く

見様袴

志ら紅葉 あれてや
この川ばた 廉の
ことも 山乃夕
なくらむ 志まま
東一

有一節祝

きら 御はし
うたゝ里 とまや
文もきてえ あえよ
万川 あり
しゃや 須か

鬼拉躰

おそれてはすさまし
くろ乃糸れつねし
もにあまてるひかり
いく代をめくらん

月多秋友

千世ふへん玉乃見
きみのあかれ月かな
すむりの須之枝
之し森

月前松風

夕まく雲を
ゆきよせ月をよ
松吹くかせ
つき乃あそし

月前擣衣

秋のよに秋
さむき衣
うちまさる
布室り月の
なそられやましと

海邊旅月

秋を
月よも波
見
いきの笑
と
おほえ志
星
ゆき
いろへ
乃
きひ
かや

湖上月明

さゝ波やちさとも
くのし波
見ゆのみしくかゞみの
山もと
いつる月
永章

古寺殘月

すみ川を山梅はき
しめにてる月乃
あくるもし霜見
行道明のかね

深山暁月

まきの杉も きこえぬ山の やま人は あきぬや うらふく 月を

野月露涼

むさしあの波 野べの末 里広乃 袖まで 露 ののすみかの 月に さえ 拾ふ人

田家見月

さをしかの はまるふ 小田に露重て月を さむし 影乃色見え山

河月似氷

すみのぼる月の光を清く みえかきのは 岸すそ見しれる氷 見えしみえる

正月

柳

うらゝかき春くる風のたちそれや日かげへともつる
あをやぎの糸

鶯

きゝ来てハ幾日をもすきん
あさとおようくひすなる
まちのくれ竹

二月

桜

かさしたる道ゆく人の
それとしも桜をさきたる乃宿

雉

狩人乃かすみにまよふ
なれ日をいはすふるの
さえずるらん

三月

藤

まつ春乃うらみや
まつをさくにのらの
さくらちる花
色の中のみち

雲雀

すゝれ咲もえる庵よ
やうのりて
野をふかうしみ
くし波音に

四月

卯花

白妙の衣ほしてふ夜もなきて
うれねもたつ咲る卯花

郭公

ほとゝきす波おもふ里にさし乱
まちうれひかねの五月まつれ

五月盧橘

神なかくやさ月も宿はよ
うなく波よほよ新の花らむ

水鶏

まれ乃戸をとくとくぬなれ
あ宜かる乃よ人やかやめの
のきぬうはかか

六月常夏

大つき乃日影よいとゝなつ月の
枝とさえおし此常夏のくれなゐ

鵜

こしかたの　ちやくさり
鵜川よ乃はゝ　うかひの
かゝり火乃　う庭

七月女郎花

秋なしてなまれも逢見城ふ
ちれなやをきし思合乃し
え

鵲

かの花よに　ふる　ちきり　まちかさく
たなはたを　あれ　そき乃
なすと　まち　とし

八月鹿鳴草

秋の野の　やそうち
いつの　ろふれと
を出さぬ　ゆくの
花よ　英

鷹

かの天川　まい川ほと
しらさき
秋乃かのくも　神の里
すみの戸よ　乃ますみ

九月 薄

花すゝき草乃
袂乃つゆけさ
を捨てゝ
くれゆく
秋乃
つれなさ

鶉

人めさへ
いとゞ深草
かれぬとや
ふゆまつしもに
うづらなく
らむ

十月 残菊

神な月しもよ
きくのにほはずは
あきのかたみに
なにゝおかまし

鶴

夕日かげむれたる
たづのさしながら
しぐれの雲や
やまめぐりする

十一月 枇杷

冬乃日はきくさのこさぬ
しもの色をはかへぬ
えだの花ぞまがふる

千鳥

ちどりなくかもの河瀬の
よはの月ひとつにみがく
山あひのそて

十二月 早梅

色うづむかきねの雪の花ながら
としのこなたに匂ふむめが
枝

水鳥

ながめする池乃氷にふる雪の
かさなるとしををしの毛
衣

霞　攝政

春賀須美志乃仁衣
遠ゝ利波遍天幾加
保須良武阿萬能
賀久山

若草　御製

志ゝりゐる春日乃
飛火の草は之乃
川まなしゞても
雪乃むらきえ

花　有家朝臣

今日すてハ志賀乃
乃山桜あすハ雪と
たゝなれなる里

郭公　前大納言忠良

郭公なかしつる忍に
さよ更て梅すのゝと
まれ末志乃ゝめ
北空

五月雨　雅経

亀乃おの瀧も白玉千代乃数
いとまにあまる五月雨の比

納涼　女房讃岐

川之里浪之に
き川ふし志もや
志らしの秋を
まねきそむらむ

秋野　女房宮内卿

月やしる風もやとはむ
うつろひて万川の露
ほにいでそむる花乃
のきはなあさ霧

月　御製

秋乃月志のに宿かる影たけて
をさゝ原
露ふけにけり
乃はらえ

紅葉　前大僧正慈圓

あらしはる　ちしほの色は　山川に　はてゝ木葉に　うつもれ　あらしまかな

千鳥　女房丹後

きゝなれし　あしの葉の　墨のまくれ　このまの　波むこそ　友ちとり

氷　俊成卿女

婦ゆをへて　やとまし　三川のさはまる紙　なかの　よなに　月の　秋悲月

雪　定家朝臣

まこと山のあらしを　たつ川のめ雪の色に　わしのみちれ　花のりをちるらく　まし

九州大學圖書印

衣六十九